

国際化が急速に進む今、母語だけでなく、第2言語を使う子どもが増えている。このほど、東京大で開かれた日本子ども学会「多文化社会と子どもたち」未来をつくる共生と支援」で、その問題点が議論された。

二つの言葉を使いこなす「バイリンガル」。関西学院大教授の山本雅代さんは「多文化に生きる」とへの無理解や誤解から、せっかくの能力をうまく生かせない子が少なくない」と指摘する。

単一の言語社会に在ると、バイリンガルへの思いこみが生まれるという。表。「幼児期から2言語にさらされると混乱する」は誤りで、国際結婚した親を持つ2歳2か月の女の子が、すし屋の水槽の前で、英語を話す父に「Fish-

バイリンガルへの思いこみと誤解の例（山本教授による）

- ①幼いうちから2言語にさらされると子どもは混乱する。
- ②日本に住む、日本語を母語としない子は日本語の習得が最優先。家庭でも使うべき。
- ③子どもは言語の習得も早い忘れられるのも早い。

Like it!」、日本人の母に「おなかをすきな」と、相手に合わせた。「2言語のまじるチャンポン語」が起るケースもあるが、成長すればきちんと振り分けられる」と山本さん。

国際結婚で親の使う言葉が日本語でない場合、「学校の先生が、家庭でも日本語を使うよう指導するのは酷。『母語が日本社会に必要ない』という隠れたメッセージになり、親やその文

化への尊厳を奪いかねない」と警告する。「子どもはすぐ言葉を使える」も誤解で、帰国した子が海外で得た言葉を一時的にしゃべらなくなっても、環境次第でいち早く取

バイリンガルの子ども

価値観の違いで不調に

り戻せるという。

脳科学の観点から、東京大助教授の酒井邦嘉さんは「1〜3歳で脳に書き込まれた第2言語は、成長過程で一時的に現れにくくなるが、脳の記憶部分にうまく

こども

おとな



第2言語の習得をめぐる問題などを話し合った日本子ども学会のシンポジウム（東京大で）



第2言語 単に外国語をさすのではなく、例えば、日本にきた外国の子ども、海外で暮らす日本の子どもが、日常生活で使わねばならない、母語以外の言葉を使う。

アクセス（呼び起こし）すれば、成長後に使いこなせるだろう」と解説した。

*

思い込みが無理解・誤解生む／不安定な心 大人がサポート

異文化によるカルチャーショックについて話したのは、神田外語大教授のヒタシ・ユディットさん。「子どもは、大人と違った形で受け止める」と注意を呼びかけた。ハンガリー出身のユディットさんは「大人は言葉の違いを壁に感じがちだが、実際は習慣・社会行動の違いが大きい。子どもは、言葉の違いを早く乗り越えるが、価値観の違いからくる周りの人との衝突にショックを受けやすく、心や体が不調になる」とした。子どもにとって多言語の活用は、言葉だけでなくそのものになる多文化を受け入れることだ。周りの大人が、異なる価値観の衝突からくる子どもの不安定な心をどうサポートするかが問われそうだ。

（山畑洋二）